We Learn

月刊 男女共同参画のための情報誌
ウィラーン
公益財団法人 日本女性学習財団

特集
超高齢社会時代へ

巻頭言―秋山 弘子
長寿社会に生きる

研究レポート―庄司 洋子
シニア層にとっての学び
― 立教セカンドステージ大学の経験から

このひと
桑原 静さん
(BABA ラボ代表)

活動情報
高齢社会をよくする下関女性の会(ホーモイ)

Women's Art ― 小林 緑〈新連載〉
音楽をジェンダーの視点で聴き直す
第1回　女性でも作曲できる？

4 2014
since 1952
vol. 729

研究レポート

シニア層にとっての学び
―― 立教セカンドステージ大学の経験から

庄司 洋子

高齢化社会、高齢社会を経て、人口減少に向かうほどの超高齢社会に到達したとされる日本では、当然ながら「老い」の意味が大きく変化してきた。そして私自身も、長く勤務してきた大学での「定年」という個人的体験を通して、老いとは何かという問いに正面から向き合うようになっている。加えて、私が定年後に関与することになったシニア層対象のユニークな生涯学習プログラム「立教セカンドステージ大学」(Rikkyo Second Stage College, 略称RSSC)の実践のなかに興味深い発見が少なからずあったので、それを紹介しつつシニア層にとっての学びの意味を考察してみたいと思う。

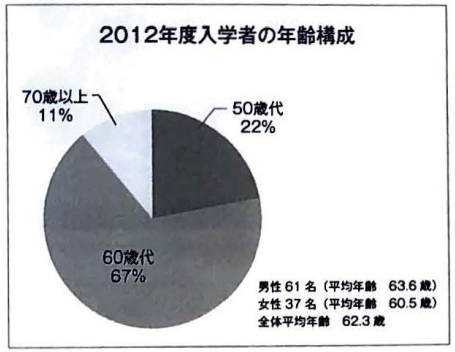
■シニア向けの新しい生涯学習プログラム

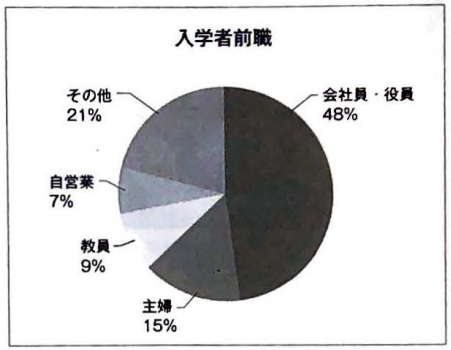
まず、簡単に立教セカンドステージ大学(以下RSSCと記す)を紹介させていただく。RSSCは、立教大学が2008年に50歳以上の男女を対象としてキャンパス内に創設した、シニア世代のための生涯学習プログラムである。本科は1年制、定員70名であるが、例年応募者は定員を超え、2013年度6期生までの修了生合計は約570名に達している。修了者の総計で見ると、男女比はほぼ半々、平均年齢は60歳を少し超える構成である。修了者には文部科学省が定める学校教育法上の履修証明書が交付される。なお、本科修了後、希望者はさらに1年間の専攻科を受験することが可能で、例年、定員30名を上回る進学者がいる。

RSSCには、入試(履歴書・2,500字程度の課題エッセイの提出、複数教員による面接)があり、履修課程では選択科目のほかに必修科目のゼミナール・修了論文がある。これは、一般の生涯学習プログラム(カルチャーセンター・自治体等の講座や大学の公開講座)のアラカルト方式に比べるとハードルが高いと思うのだが、RSSCに集うシニア層にはそれを超える学びの欲求があるということだろう。実際、RSSC受講生のなかには、すでにさまざまなカルチャーセンターでのショッピングをした後、飽き足らずここにたどり着いたという人も珍しくない。民間企業・自治体・大学等が競って生涯学習プログラムを提供しているものの、なかなかシニア層を満足させるものは多くないらしい。

■老いの楽しみ方

定年が人生の終焉の接近を意味したのは過去のことである。定年の後はもはや「老後」ではなく、ましてや「余生」ではない。生物学的には死期に向かう老いの過程が、ヒトの一生のなかで驚異的な長さと重さを増した結果、独自の価値を持つようになってきているのだ。RSSCの受講生を見ていると、定年とは、人生にそのような価値ある段階があることを自覚させる絶妙の仕掛けではないかと感じさせられる。





出典:立教セカンドステージ大学ニューズレター(第9号)3頁「2012年度本科生(5期生)の横顔」より

改めて老いの価値とは何かを考えてみるに、老いは、それまでの人生の評価基準をリセットするという素晴らしい側面を持っているのではないかと思う。実際、RSSCの受講生がそうであるが、学業成績や職業上の業績等による様々な競争から解放されたシニア層には、独特の元気がある。頭脳や容姿容貌や身体能力等は、若い時期にいかに傑出していたとしても、シニア期にはある程度平準化されてしまい、やがては評価不能になってしまう。老いがはからずも格差縮小をもたらしてくれるのであって、ここに老いの楽しみ方のポイントの一つがあるのではないかと思われる。

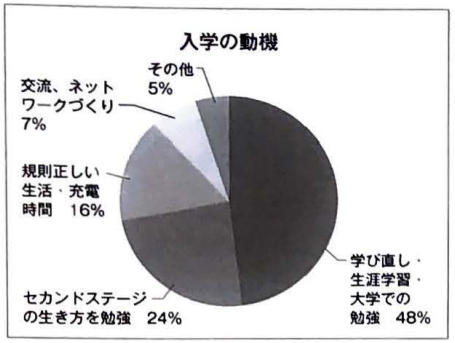
評価基準がリセットされるシニア期では、ささやかながらも安定した生活を支える程度の経済状態や健康状態が極めて重要であり、さらにそれ以上に重要なのが、家族・親族や知人・友人等との円満で楽しい人間関係である。RSSCには、男女を問わず、これまでの歩みの延長ではなくてリセット後の新しい一歩を進めたい、という人が集まっているから、そこでの学びの意味もそれ以前のものとは違ってきている。知識や成績が何かの達成につながる必要はなく、学ぶこと自体を楽しめばよい、というのはまさに老いの特権である。そして、学びの機会ばかりでなく、これまで出会うはずのなかった人たちとの出会いの機会を得たことが何物にも代えがたいRSSCの魅力だ、という受講生が多いのは、彼らがすでにリセットされた世界に入り込んでいるからだろう。

■団塊世代とジェンダー

RSSCの構想は、いわゆる団塊世代の定年という社会事象を視野に入れたものであるが、そこでの実践の真の意義は、単に大量発生する定年退職者の受け皿づくりではなく、団塊世代と言われる人口集団の特徴に適切に対応することだ、と改めて感じている。

日本の経済成長を担ってきた団塊世代についてはすでに多くが語られているが、なかでもこの世代の大学進学率が2割以下だったことは、RSSCが「学び直し」と「再チャレンジ」を掲げて登場する主要な動機の一つになっていた。RSSCにはもちろん多数の大卒者が来ているが、受講生の中には女性であるというだけで大学進学を断念させられてきた人も少なくない。RSSCは大学で学ぶことができなかったそのような人たちにその機会を提供しているのである。

メデイアでもしきりに言われた「団塊世代の定年」という言葉は、日本の経済成長の担い手として働き抜いてきた男性たちに焦点を当てている。しかし、その背後にはそれを支えてきた女性たちがいたことを忘れてはならない。そもそも団塊世



出典：立教セカンドステージ大学ニューズレター（第9号）3頁「2012年度本科生（5期生）の横顔」より

◆入学後の良いところ　上位3点

1. 多様な職業・幅広い年齢の友達
2. 新たな知識習得／新鮮な刺激
3. 授業が面白い／教員との出会い

◆入学後に苦労していること　上位3点

1. レポート・修了報告書の作成
2. パソコン操作
3. 生活・仕事と学校との時間の調整

代は、男は仕事、女は家庭、という典型的な性別役割分業観によって日本の企業社会を支えてきたのであり、多少乱暴に言えば、この世代は、男女ともに性別役割分業を当然のものと受け入れるジェンダー保守層が主流なのである。こうした団塊世代の特徴を反映して、RSSCの男性受講生の多くは典型的な会社人間として、女性受講生の多くは専業主婦として、そして女性受講生の一部は性別役割分業社会で働き続けるために闘う女性として、生きてきたことになる。

こうした様々な経験と思いを抱えるシニア層男女が、RSSCの講義・ゼミ・合宿・パーティ・サークル活動・飲み会等で濃密な人間関係を形成していくのだから、そこには当然いろいろな状況が発生する。受講生はもちろん学校時代に「男女共学」を経験してきた世代ではあるが、もしかするとここで真の男女共学を初めて体験しているのではなかろうか。

RSSC受講生の多くは、性別分業社会に何らかの疑問や抵抗を感じてきた男女として、会社人間からの脱皮や主婦世界との決別を、かなり真剣に追求しているように見えるからである。

■シニア層の学びの課題

シニア層の学びが、いろいろな点でそれ以前の学びと違うのは当然である。評価基準のリセットによって解放感にひたることのできる世代であるから、学びも可能な限り自由なものでなければならない。しかし、RSSCでは、選択科目を「エイジング社会の教養科目群」「コミュニティデザインとビジネス科目群」「セカンドステージ設計科目群」という3群構成にして、一定の特徴を持たせている。特に、学びが単なる学びで終わらずにその後の生き方につながることを期待して、第1群の教養科目群に加えて、第2群の社会的実践につながる科目群と第3群の自身の人生設計に資する科目群を置いているのである。

ここで、RSSCの受講生に見られる一つの傾向を示すために、私自身が最近担当した講義科目での経験を紹介しておこう。私が担当したのは第3群のなかの「超高齢社会の性と生」という科目である。内容は、超高齢社会を、単に高齢人口比率の高まりとしてではなく成熟社会（社会の成熟）として捉えることによって、これまでの社会が経験したことのない新しい事象や視点について学ぶことを意識したものである。とくに「性（sexuality）」と「生（life）」に焦点を当てて、前者ではいわゆるセクシュアル・マイノリティ（同性愛・トランスジェンダーなど）とそれをめぐる政策のあり方など、後者では近年の生殖医療の動向・到達点や男性不妊をめぐる問題などを、かなり深く掘り下げてみた。

これらをあえて取り上げたのは、団塊世代が最も苦手とする分野の一つではないかと思われたからである。結果は予想どおりで、セクシュアル・マイノリティや生殖医療について、ほとんど知識がない、あるいは、驚くほどの偏見を持っている、という受講生が少なくなかった。さすがにジェンダー保守層であり、授業後の感想シートには、こういう内容を授業で取り上げることに驚いた、テーマに疑問を感じた、ジェンダーは嫌い、性や生殖は恥ずかしい、という抵抗や忌避感を示す受講生がいた。とりわけこの傾向は男性に多かったようである。しかし、回を追うごとに受講生の反応は変化していき、私から見ると授業の成果を十分感じられるものとなった。セクシュアル・マイノリティに関する高校生向けDVD教材なども用いたので、いまどきの若者と団塊世代との間にある、この分野に関する意識状況の差異を受講生が自覚するという局面もあったと思う。

このように、自分たちの生きた時代や置かれている状況を相対化するための学びは、今後を生きるシニア層にとって重要な課題の一つだろうと思うし、私自身の学びの課題にもなったと感じている。

■シニア層の学びと大学の役割

日本の大学キャンパスのほとんどは、10代の終わりからせいぜい20代前半までの若者の学びの場になっている。大学院教育が重点化された現在でも基本的にこの傾向は変わらず、大学生の年齢層を示すOECD諸国のデータとは大きな隔たりがある。しかし立教大学キャンパスでは、RSSC受講生の存在によってその風景が変わりつつある。大げさに言えば、誰が生徒か先生かというような感じで普通にシニア層が学部生に混じっているのだ。受講生の姿に独特の活気を感じるのは、シニア層を特別に囲い込まない、こうした環境のせいではないかと感じている。受講生は、キャンパス施設（図書館・メディアセンター・学生食堂など）をフル活用するだけでなく、学部生の一般教育科目の一部を学部生と共に履修することも可能である。このことを私たちは「異世代共学」の実践と位置付けており、「男女共学」と並ぶ「二つの共学」と呼んでいるが、異世代共学は大学を再生させる新しい方向性を示すものだと感じている。

こうしたRSSCの実践は、シニア層の学びを友人づくりや新しい知的発見を含む楽しくて贅沢な学びにとどまらせず、もう一つの方向を模索させている。生涯現役でありたいと願う前向きなシニア層が学びを通じて求めるのは、この先何十年もあるかもしれない人生の居場所であり活動の場だからである。受講生は、生きる意味を追求し越境する喜びを感じながらも、若い学部生以上に真剣に社会とのつながりを求めている。受講生が、RSSC修了後に次の学びの場を求めるのも自由であるが、単なる浮動・漂流シニア層にならずに済むよう、大学は総力をあげてシニア層を応援すべきだし、そのための資源を保有していると思う。

立教大学チャペルでの荘厳な入学式

ゼミ授業風景

しょうじ ようこ：立教大学名誉教授。東京都民生局（現・福祉保健局）職員、日本社会事業大学教授、立教大学社会学部教授、同大学21世紀社会デザイン研究科教授を経て、現在に至る。専門は福祉社会学・家族政策論・ジェンダー論。立教セカンドステージ大学の創設にかかわり、現在も講師を務める。